# C-up ワールド

## 2002年12月号

### ２００２年１１月の山行記録

**自主山行**
**表妙義･裏妙義**
**１１月１５日夜～１７日**

参加者

田口浩昭・山野昭人・横川秀樹

天候・気温

16日　晴れ
17日　曇り

コース・行程の概要

15日　夜20時頃、車で池尻出発。
所沢IC経由で松井田妙義ICへ。
妙義神社付近の駐車場で幕営

16日　表妙義縦走(石門入口～金洞山～白雲山～妙義神社　麻苧の吊橋の駐車場で幕営)
17日　裏妙義(麻苧の吊橋～鍵沢～丁須の頭～御岳～麻苧の吊橋)

コースの核心・講習のポイント

危険な鎖場の通過
高度感の克服

報告者のひとこと感想

「春のハイグレードハイキング」を特集した今年の岳人３月号をご覧になった方も多いだろう。私はその中の「スリルあふれるクライミングワールド表妙義金洞山縦走」という記事に興味を惹かれ、いつか行ってみたいと思っていた。そして今回、同期(22期)のＹ氏とＴ氏の賛同を得て自主山行を企画し、３人で行くことが決まった。

さらに、どうせ行くならということで、裏妙義の丁須の頭にも登ることにし、前夜発の２泊２日の日程とした。

初日はまず、表妙義の縦走。表妙義とは白雲山、金洞山、金鶏山の三山の総称で、そのうち金鶏山は登山禁止。また、金洞山の星穴岳と西岳も同様の措置が取られている。実際には登っている人はいるようだが)

そのため、我々のルートは、石門入口からまず金洞山（中之岳・東岳）に登り、つづいて白雲山（相馬岳・天狗岳）登頂後、妙義神社へ降りてくるという７時間ほどの行程にした。

朝４時半に起床し、５時過ぎに道の駅を出発。夜明けとともに、その怪異な姿を現した岩峰群を前に、我々新米クライマーの登攀意欲は否応なしに高まってくる。途中、中之岳の手前で「一般登山者入山禁止」の看板があり、そこで小休止。念のためにヘルメットとハーネスを装着する。ルート上にはたくさんの鎖場が連続し（鎖のないイヤらしい所もある）、腕力に絶対の自信があれば登攀具は必要ないかもしれないが、降雨など様々なアクシデントを考えればザイル等一式は必須と考えたほうが良い。

縦走中は、次にどんな悪場が出てくるのかという不安と期待の入り混じった沢登りにも通じるような面白さがあったように思う。両側がストンと切れ落ちたヤセ尾根の前では、ムムムと後ずさり全員が息を飲んでお互いの顔を見合わせた。鎖の長い登りでは強引な腕力で一気に上り切った。鎖の長い下降では、手を離したら一巻の終わり、と下を見ないで無心に降りていった。外傾バンドのトラバースでは鎖にカラビナをかけながらフェラータで渡っていった。

こうして、常に緊張した状態を強いられたが、なんとか予定通りの時間で妙義神社に下山することができた。

２日目は、裏妙義のシンボル丁須の頭を登るのが目的だ。ＪＲ信越本線の横川駅から程近い麻苧の吊橋を起点として、行きは鍵沢を登り、帰りは御岳を

経て戻ってくるという５時間半ほどの周回コースをとることにした。

この日のハイライトとなった「丁須の頭」とは裏妙義に突き出したT字型の奇岩で、高さは6mほどしかないが標高 1000mを超えたところにあるためその高度感は凄まじい。少なくとも私がこれまで経験した中では一番のものだった。

ここでは、ザイルを使って３人が続けて登ったはいいが、スペースの狭さと恐怖感から誰も岩の上に二本の足で直立することができず、なんとも情けない格好をさらしたままだった。そして一息つく余裕もなく、そのまま懸垂下降で下のテラスまで降りて、そこでようやくホッと胸をなでおろした。高度感に圧倒されっぱなしの中で、登攀やザイルワークなど必要以上に時間を費やしてしまったことが、次のステップへの反省点だと思う。

将来、再び妙義に来るときは、怪異な姿が強烈な印象を残した星穴岳を登ってみたいと思っている。

報告者　横川秀樹

△△△△△△△△△△△△△

## 講習山行
## 2002年度沢納めの会
## 裏丹沢神ノ川・大岩沢
## 11月16日～17日

参加者

坂口理子・渡部吉実（ＣＵ）
新井かよ子・福田洋子・遠藤末美（本科生）
工藤寿人・金沢和則（講師）
計７名

コース・行程の概要

１日目　藤野駅１５：００集合
車で神ノ川ヒュッテへ（泊）
２日目　神ノ川ヒュッテ７：００～大岩沢～
大室山１４：１０～鐘撞山方面への
破線ルートを　経て神ノ川ヒュッテへ１６：２０

コースの核心・講習のポイント

２００２年度沢納めの講習。春から始まった沢講習の集大成。
今まで受けてきた沢講習で身に付いた知識、技術をしっかりと復習します。

感　想

今回は小屋泊山行。朝食で起こされるまで不覚にも寝てしまった。
前夜は「沢納めだー！」と盛り上がり、同宿者と小屋番のお兄サマまで巻き込んで、つい遅くまで宴会（少し反省）。
朝食をお腹いっぱい詰め込んで7時出発。夜半降った雨上がりの登山道を踏みしめて大谷沢分岐まで。
沢に降り、全員身支度開始。水が冷たそう・・・
ガイドブックによると、「水量の多い沢で、下部では比較的大きな釜を持つ滝がある。シャワークライミングをするのに最適。あまり寒くない時期を選びたい。」とある。寒いも何も１１月の真っ只中に、しかも曇り空で肌寒いときてる。今日は心臓まで凍りつくかも・・・と、覚悟を決め入渓する。
すぐに４つの堰堤。ひと一つ、ふた一つ！！この堰堤越えが結構大変。何となく前途多難を思わせる。
み一つ、よ一つ、やっと越えた。あまり人が入っていない感じが漂っている。
すぐにF1（５ｍ）だ。気を引き締めて左から登る。
続いてF2（８ｍ）。流心を登るとあるが、当然心臓麻痺は回避しよう、と巻く。
次はF3(７ｍ)。息つく間もなく滝が続くが、これは左から登る。この先はちょっと開けて長いゴルジュになり、その先にあった！！　恐怖のF4(１０ｍ)。
本日のメインディッシュか。ゴルジュの中にゴーゴーとしぶきを上げて流れ落ちる滝。
壮大な眺めで圧倒される。工藤さんは「工夫すれば登れるかも・・・？」とつぶやくが、講習生はさっさと巻き道前に引き返して講師を待つ。
しかしルートを目で追えば巻き道も侮れない。渡部さんリードでルート確保。
さあ、行くぞ！まず８ｍほどの凹角を登る。ホールド・スタンスはたくさんある。
続いて滝上のバンドをトラバース、いいぞ！この調子。次はバンドから下に降りる。とっても緊張する。
途中ふる一いトラロープに頼らなければ足場が届かない。ドキドキ！ハラハラ！　トラさん、暴れないで、いい子でいてね・・・なんて念じたりして、やっと安全地点に到達。ほっと息をつく。
後から工藤さん曰く　「下から見上げたときは登れ

そうな気がしたが、やっぱりこの滝を登るのは無理だね」　これを聞いて何となくほっとする。理由?教えない。
それからは小さな滝をいくつか越え、ガイドにある理想的は岩小屋はまだかいなと、楽しみに歩を進める。 金沢さーん！岩小屋ってどれかな?」「これじゃない?」「ふーん！これかあ・・」なんて会話してたらあった、あった！立派な岩小屋。見た人にだけ分かる立派さ。
そしてF5（５ｍ）・F6(８ｍ）と続けて滝が見える。秋の色づいた木々の中に段々に流れ落ちる白い水の動き。絵のように静かで美しい。これはさほど苦労せずに通過。
この頃には寒さも吹っ飛び汗ばむほど。でも、待ってる時や休憩時はやはり寒い。
さて次なる難関はF7(７ｍ）。左から残置シュリンゲめがけて登る、とあるが見るからに難しそう！！あのシュリンゲまで届きそうもないなあ・・・と心細く見上げていたら、金沢さん、リコちゃんが樹木の中に巻き道を確保。木につかまり登り上げ、懸垂で２段下降、滝の上を通過して沢口へ降りる。とってもスリリング♪F8(１０ｍ）は問題なく登ったのかあまり記憶にない。その先は小滝がいくつも続き、地図上での三俣を確認。やがて水も枯れ、枯れ滝を幾つか越え、詰めのガレを喘ぎ喘ぎ登り稜線に出る。この稜線に出た時、いつも感激そして感動。途中のドキドキ、ハラハラ、ワクワクのいろいろな思いが融合し、ひとつになり、体中にみなぎり、そして冒険の後の宝物を手にしたような気持ちで、顔が紅潮する。心は充実感でいっぱい。
それから５分程稜線を登ると大室山山頂の広場に出る。途中ほんの少しだけど雪が所々にあった。寒いわけだ。山頂広場で身支度を整え、「こんな時期に沢に入るなんて物好き集団だと思われるよねー」なんてワイワイ騒ぎながら一休み。
下山は本科生らしく？破線ルートで神ノ川ヒュッテまで。
今年も５月１２日の奥多摩・小坂氏志川本谷の沢初めから大岩谷の沢納めまで楽しく沢講習に参加出来たことを講師諸兄及びお仲間の皆様に感謝いたします。

報告者　矢沢 悦子

△△△△△△△△△△△△△

**講習山行**
**湯河原幕岩・悟空スラブ（救助訓練１）**
**１１月２４日**

参加者

矢田実・矢沢悦子・柴崎るみ子・新井かよ子・
茨木嘉道・渡部吉実・長田幸子（ＣＵ）
佐々木恵子・柳澤栄一・末木俊之・山野昭人・
山野美香・横川秀樹・田口浩昭・福田洋子・
吉国好道・伊藤幸雄・南谷やすえ・浅子裕子
（本科生）
黒田記代（シニア）
金沢和則・松浦寿治・工藤寿人（講師）
計２３名

天候

曇り、風あり、寒い。

山行のポイント

緩い斜面での救助訓練

感　想

前日２３日の幕岩・茅ヶ崎ロックでの岩登りトレーニング参加者数名の方々は、幕山公園駐車場近くの広場にて前夜から宿泊しての参加でした。前日は雨に濡れた岩場で、岩登りが難しかったようです。
まずは、広場の木を使って、負傷者吊り上げシステムの説明が３０分ほどありました。（これは各自の実習無しです。）
悟空スラブまでは、公園広場から３０分ほどの登りでした。幕山のかなり上です。スラブ付近ははっきりとした踏み跡が無く、１人で来たら迷ってしまうような場所です。スラブは前日雨の湿り気が残り滑り気味でした。私の履いていた靴はフリクションが悪く、ザックを背負っての登りは緩斜面でも十分怖いものがあります。男女別々の４グループほどに別れそれぞれのグループにＣＵ１，２名ほど付きリーダーになり、メニューをこなしました。われわれのチームは狭いテラスをベースにしての実習でした。ザックも支点に固定して食事休憩など簡単にはでき

ない所です。

緩斜面における救助3つの技術を各自実習しました。

１．介助懸垂。

事故に遭いダメージを負っている事故者を利き手で背後から支えながら、非利き手でザイルを制動し懸垂下降するもの。エイト環での制動をさらに強くするためザイルをハーネスに付けたカラビナを通過させ、折り返し、エイト環側のカラビナを通過させさらに折り返させて制動するというもの。（文章に書こうとすると混乱します。山野さんの『山塾写真帳Ⅱ』の記述を参照して自分の言葉で書いてみようとしたのですがうまく記述できません。）私は、まずここで、エイト環から来たザイルを折り返すカラビナをシットハーネス左側のカラビナホルダーに装着してしまうという過ちを犯しました。ハーネス本体の前面にカラビナをしっかり装着するべきだったのに．．．。（シットハーネス前面がごちゃごちゃして混乱します。あわてるのは禁物です。

２．振り分け背負い懸垂

スリングで負傷者を背負い、１．と同様に懸垂下降しました。エイト環に重い加重が掛かりザイルの流れが非常に悪くなりました。利き手でエイト環付近のザイルの流れを調整するとわりと上手くザイルが流れました。複雑（？）なザイルの折り返しのためザイルが妙にからんで流れなくなったがケース発生しました。人を背負った状態でザイルのからみを解くのは大変そうでした。その時私は、背負われ側の立場で楽チンでしたが．．）

３．結び目通過。

１人が負傷者を背負って下降して、あと２名が上方の支点にてエイト環でザイルを制動している状況で、ザイルの結び目がエイト環を通過する手前にてする作業。プルージックを負傷者側のザイルに付け、プルージックから延ばしたスリングを支点を通過させ、１人が足で踏む。すると負傷者側のザイルが足の力で支点に引き寄せられ固定され、非負傷者側のザイルが荷重からフリーになる。その時もう１人がザイルの結び目をエイト環通過させるというもの。

４．ダブルロープにて登攀中、リード者が負傷し、岩場で動けなくなっているのを救出に向かう練習。ビレイ者は、ハーフマスト仮固定で１本のザイルをエイト環に仮固定した後、他方のザイルにスリングをプルージックで掛け、適切な支点につなぎ、固定する。ビレイ者は仮固定をはずし、ザイルからフリーになり、負傷者救出に向かうという訓練。ここでまずハーフマスト固定の方法を忘れていました。夏の救助訓練は去年受講しましたが、１年経つと忘れてしまっていました。

以上４つのメニューを結局１４時過ぎまで、休み無しでこなして下山。私は寒い風にずっと晒されていたためか風邪をひいてしまいました。それにしてもこの手の複雑な（？）ザイルワークは文章に書こうとすると混乱します。ちょっと文章センスの無さも感じます。上手でなくても自分なりに絵に描いてでもおかないとしばらく経つとすっかりわからなくなりそうです。

報告者　末木 俊之

△△△△△△△△△△△△△△△△

## 自主山行
## 広沢寺
## 11月30日

参加者

山野昭人、山野美香、横川秀樹

天候

曇り

山行のポイント

スラブでのリードクライミング

感　想

朝８時半に岩場に到着したときはすでに２パーティーがいて、我々のすぐ後にも十数人が大挙して押し寄せてきたため、広沢寺の岩場は、朝９時には超満員の状態となっていた。

我々が最初に取り付いたのは、「一般中央ルート」(5.8)。ここを、私がリードで登り、続いて山野夫妻が登る。

次は奥様が「一般左ルート」(5.7)をリード。旦那様も同ルートをリードする。

その後は、中央部分のフェイスと右側のフェイスは大混雑なので、左側のＡ１ゾーンの上部の「黒フェイス左」(5.8)に移動することにした。この移動には、アブミを使ってハングを乗っ越す必要があり、アブミのトレーニングも兼ねる形となった。

さて「黒フェイス左」だが、ルート自体は短いが、ホールドが細かく旦那様は苦戦。代わって私が何とか終了点までたどり着き、夫妻が続いた。

午後になって、対岸の岩場へ移動したパーティーがいたため、午前中のような混み混み状態は緩和され、クラックルート（一般ルート：5.7）を登る。ここは夫妻がそれぞれリードした。

登った本数は４～５本だったが、一人がリードして二人が続き、懸垂で３人が下降するというパターンに少し慣れてきたと思う。

報告者：横川秀樹

△△△△△△△△△△△△△△

**投稿**
**C－UPコラム『新人クライマーのひとりごと』**
**第1回**

## 山とパソコン

横川秀樹

今年5月１７日午前９時、東大3年生の山田淳氏がエベレストに登頂し、世界最年少のセブンサミッター（七大陸最高峰登頂者）となった。１９９９年に野口健氏が達成したときは２５歳、２００１年に石川直樹氏が記録したときは２３歳１１ヶ月。今回はそれを上回る２３歳と１ヶ月でのことだった。

そして、この記録と同時に、もうひとつの世界初が達成されたのをご存知だろうか。

実は、山田氏はエベレスト山頂にＩＢＭの特注ノートパソコンを持ち込み、その起動に成功したのである。残念ながら起動したあとすぐに電源が落ちてしまったそうだが、８８５０ｍの嶺にノートパソコンを持って行ったのは山田氏が初めてだ。こうなれば、世界最高峰からＥメールが送られたり動画がリアルタイムで発信されるのは、もはや時間の問題だろう。

さて、話は８０００ｍの高みからぐっと下がって一気に現実的になるが、我々安全登山を心がける者にとっても、もはやパソコンなしの山行は考えられない時代になってきた。とは言っても、もちろん山田氏のようにパソコンを担いで登頂しようというのではない。

２１世紀の今、パソコンでインターネットに接続し、目的の山、岩、沢の名前を入力しさえすれば、必要な情報は一瞬にして手に入る。これが当たり前の時代である。そして、それを有効に利用した人とそうでない人の差は、残念ではあるが、歴然と存在する。 と思う）

例えば、無名山塾のホームページを見てみると、そこには貴重な情報が満ちている。山道具や食料についての松浦講師の解説や遭難事故に対するノウハウなどは我々の血や肉となるし、岩崎主宰の過去２０年にわたる文書の蓄積は我々の精神面を磨き上げてくれるものだ。さらに、山野夫妻担当の山塾写真帳は我々自身の足跡であり、２２期の同期として見逃せない労作だ。

もちろん、山は人と人とのつながりであり、直接話して伝えるのが一番という意見は、全くその通りであると思うし、あくまでもネット上の情報は補助的なものに過ぎないと言われれば、それも然りである。また、膨大な情報の中から役に立つものとそうでないものを選別し、正しいものと誤っているものを見極める能力が必要なのは言うまでもない。

しかし、そうした点をかんがみても、あるとないでは大違いというのは、やはり否定できない事実であり、現在ネットに接続できる環境にない方は、土日を１回つぶしてでも、是非その作業をされることをおすすめしたいと思うのだ。

さて、最後に、２２期の新人達がネット上で連絡を取り合っている方法についてご紹介します。これはメーリング・リスト(ＭＬ)という仕組みを使うもので、sanjc22@egroups.co.jp というアドレスを取得し（Yahoo で無料で取得可能）、そこにメールを送ると２２期のＭＬ登録者全員にそのメールが配信されるという便利なシステムになっています。（FAX同報通信みたいなものです）

このＭＬ上では、日常的に活発なメールのやり取りが交わされていて、自主山行の計画、今後の講習

参加予定、講習後の反省点、机上講座に出られなかった人に対しての内容報告など、様々なことが話題になっています。

２２期でこのＭＬの存在を知らなかったという方、いらっしゃいましたらゴメンナサイ。参加されたい方はご連絡をお願いします。

cupcolumn@yahoo.co.jpまでメールでご連絡下さい。（携帯電話のメールでは参加困難のため、パソコンがいいと思います）

また、これは２２期で小さくまとまろうという主旨で作ったのものではありません。まずは横のつながりを作ってホンネで話し合い、時にはオーバーヒートしたりしながら、次のステップでは、上にも下にも斜めにもその輪を広げていくことを視野に入れています。　　（秀）

## 編集局から

１１月は、岩関連の講習が多く、編集者といたしましては原稿依頼をちょっと躊躇いたしまして（岩講習の山行報告を記述するのはちょっとむずかしい感じです）掲載原稿が足りない様子でしたが、コラム原稿など頂き１２月号が発行できました。

紙面枚数調整もあり、救助訓練の山行記録を編集者自ら記述してみましたが、複雑なザイルワークの技術講習の記録はやはり難しいです。（『最新クライミング技術』にもピッタリ該当する記載がありませんし）理解が不十分で間違った記述をしてしまった箇所もあるかもしれません。技術的要素の高い講習の山行原稿を書くのはやはり勇気が必要です。

本科２２期の皆様は、ML（メーリングリスト）にて連絡を取り合っていたのですね。（活発な活動を促す１つの要因でしょうか？）MLに参加すれば、１人が書いたメールが登録された全員に自動的に配信されますので便利ですね。本科に入りたての人もMLに参加すれば、仲間内の活発な連絡・議論のやりとりに速やかに入り込んでいけそうです。

自分より技術・経験レベルが上の人達が参加するML（メーリングリスト）で発言するのは、さすがに気が引けますが、同じレベルを持った仲間のＭＬ（メーリングリスト）に参加するのは、気楽に発言できて楽しそうですね。それに自主山行の計画や、同期内の連絡などもスムーズに進められますね。

同期のML（メーリングリスト）を構築するのはなかなかいいやり方だと思われます。

今後も、講習山行記録原稿、自主山行原稿以外にもいいアイデア・山域研究風な原稿などなど、投稿原稿を頂ければ、どんどんＣ－ｕｐワールドに掲載いたします。

今後もみなさまのご協力をよろしくお願いいたします。

## アドレス

無名山塾　http://www.sanjc.com

山塾サポート　RXL13656@nifty.ne.jp

Phone　03-3941-3481

Fax　03-3941-3482

ｉモード

http://member.nifty.ne.jp/c-up/i.htm